

# 陸の水

==== No.100 ====

日本陸水学会東海支部会

ニュースレター（2024年4月17日）

発行：日本陸水学会東海支部会

連絡先：〒501-6021 岐阜県各務原市

川島笠田町官有地無番地

国立研究開発法人土木研究所

自然共生研究センター

松澤 優樹

Tel:0586-89-6036、Fax: 0586-89-6039

E-mail: [matsuzawa-m573bs@pwri.go.jp](mailto:matsuzawa-m573bs@pwri.go.jp)

## 目次

- 2023年度第26回研究発表会の報告（p.1）
- 2023年度第27回総会の報告（p.3）
- 2024年度研究助成の募集案内（p.9）
- NL100号の記念記事「歴代会長からのメッセージ」（p.10）
  - 松本 嘉孝（「陸の水」ニュースレター100号を記念して）（p.10）
  - 八木 明彦（日本陸水学会東海支部会の設立について）（p.11）
  - 井上 祥一郎（技術者の会長）（p.14）
  - 宗宮 弘明（サマースクール，見学会）（p.15）
  - 寺井 久慈（教科書）（p.19）
  - 谷口 智雅（御嶽調査研究）（p.20）
  - 野崎 健太郎（論文集）（p.22）
- 幹事退任のあいさつ（p.25）
- 会費納入のお知らせ（p.26）
- 編集後記（p.26）

## 2023年度第26回研究発表会の報告

大八木 英夫（南山大学総合政策学部）

日時：2024年2月17日（土）－18日（日）

場所：愛知工業大学・自由が丘キャンパス

2024年2月17日・18日に、愛知県名古屋市の愛知工業大学自由ヶ丘キャンパスにおいて、第27回総会・第26回研究発表会が実施されました。今回は、自由ヶ丘駅徒歩1分という、アクセス抜群な会場を、元会長である内田臣一氏にご準備いただいた。発表件数は、20件の演題が登録されました。

また、本発表会では、ニュースレター『陸の水』が本号をもって100号を向かえることもあり、その記念として、初代会長の八木明彦氏から現会長松本嘉孝氏

までの歴代の会長に声かけをし、特別企画として、主にいままでの事業と将来への期待について語っていただいた。

2023年9月の事前準備では、オンラインながら多くの諸先輩方にご参加頂き、「これまでの日本陸水学会東海支部の歴史を振り返りながら、次世代につながる寄稿文の作成」についてまとまった。その際にとりまとめられた研究発表会場一覧については表1に記しておく。表1をみるだけでも、2019年から入会した執筆者にとってみると、諸先輩方に感謝がこみ上がると同時に、これからの継続について心を強くする。

また、研究集会の1日目には、「ニュースレター100号記念 これまでの陸水学会東海支部の活動の振り返りと次世代の学生・研究者へのメッセージ」と題した特別セッションがパネルディスカッション形式で開催されました。当日参加した6名の歴代支部会長（第4代会長 野崎健太郎氏、第6代会長 宗宮弘明氏、第8代会長 谷口智雅氏、第9代会長 井上祥一郎氏、第10代会長 内田臣一氏、司会 松本嘉孝 第12代会長）に参加していただきました。冒頭司会より、当日参加がかなわなかった第1, 5代会長 八木明彦氏の「東海支部の設立」について、第3代会長 寺井久慈氏の「身近な水の環境科学出版」についての文章の要約が紹介されました。

トークセッションでは、まず支部会の歴史や行われてきた活動についての振り返りについて、各歴代会長から発言がありました。具体的には、野崎氏からは「陸の水論文集」、宗宮氏からは「サマースクールや見学会」、谷口氏からは「御嶽調査研究」、井上氏からは「研究発表会や地域連携」、内田氏からは「談話会」でした。その後、次世代へのメッセージが各歴代会長から、「人とのネットワークを作る場としての学会の意義、その場として懇親の場、知恵をぶつける場、なんでもありの場」といった意見があり、東海支部会が持つ、多様性、寛容性が高い雰囲気未来に向けても維持することの大切さを感じました。また、歴代会長からの寄稿については、本ニュースレター内で一部掲載するほか、次回の「陸の水」論文集でも支部会の歴史とともに掲載される予定です。

学生発表賞についても実施され、投票の結果、最優秀賞は坂上野々香さん（名古屋大学）「札内川の洪水による河床変動強度の要因分析」、優秀賞は佐田 祐正さん（滋賀県立大学）「環境配慮施設における洗堀を促す水制工配置の検討」と吉田 透吾（豊田工業高等専門学校）「森林流域における基岩の差異に着目した溶存態ケイ素流出特性の把握」となりました。

他の学生さんの発表も含めて、アイデア・活気のある研究発表を聞いて、力を頂きました。まだまだ負けるわけにはいきませんね。2024年度は、さらに活動量を増やせることを期待しつつ、皆様におかれましても、会を盛り上げていただきたいと思います。

表 1 発表会場一覧（2023 年度まで）

| 年度   | 研究発表会数 | 研究発表会場               | 会場自治体        | 会長    |
|------|--------|----------------------|--------------|-------|
| 1998 | 1      | 海津苑                  | 岐阜県海津町       | 八木昭彦  |
| 1999 | 2      | 岐阜県婦人会館              | 岐阜県岐阜市       | 八木昭彦  |
| 2000 | 3      | 希望荘                  | 三重県菰野町       | 八木昭彦  |
| 2001 | 4      | サンヒルズ三河湾             | 愛知県蒲郡市       | 八木昭彦  |
| 2002 | 5      | 高田青少年会館              | 三重県津市        | 田中正明  |
| 2003 | 6      | 四日市大学                | 三重県四日市市      | 田中正明  |
| 2004 | 7      | 昼神温泉鶴巻荘              | 長野県阿智村       | 寺井久慈  |
| 2005 | 8      | たかお                  | 岐阜県郡上八幡市     | 寺井久慈  |
| 2006 | 9      | 寿楽荘                  | 愛知県豊田市       | 野崎健太郎 |
| 2007 | 10     | 森林公園森の家              | 静岡県浜松市       | 野崎健太郎 |
| 2008 | 11     | 青年会館                 | 愛知県名古屋市      | 八木昭彦  |
| 2009 | 12     | 観月荘                  | 岐阜県恵那市       | 八木昭彦  |
| 2010 | 13     | 阿南コミュニティーの森 阿南少年自然の家 | 長野県下伊那郡阿南市   | 宗宮弘明  |
| 2011 | 14     | 静岡大学農学部 上阿多古演習林      | 静岡県浜松市       | 宗宮弘明  |
| 2012 | 15     | さざなみ                 | 愛知県佐久島       | 石田典子  |
| 2013 | 16     | 寿々波                  | 三重県答志島       | 石田典子  |
| 2014 | 17     | 東海大学社会教育センター 三保研修館   | 静岡県静岡市       | 谷口智雅  |
| 2015 | 18     | 滝旅館                  | 長野県木曾郡王滝村    | 谷口智雅  |
| 2016 | 19     | 四日市霞ヶ浦会館, 湯の山ロッジ     | 三重県四日市市, 菰野町 | 谷口智雅  |
| 2017 | 20     | 木曾郡民会館, 木曾三河屋        | 長野県木曾郡木曾町    | 井上祥一郎 |
| 2018 | 21     | 生命の海科学館, 形原温泉 山田館    | 愛知県蒲郡市       | 井上祥一郎 |
| 2019 | 22     | 山びこの丘                | 愛知県新城市       | 内田臣一  |
| 2020 | 23     | ZOOMオンライン会議          |              | 内田臣一  |
| 2021 | 24     | 豊田高専, ZOOMオンライン会議併用  | 愛知県豊田市       | 山本敏哉  |
| 2022 | 25     | 南山学園 伊勢海浜センター        | 三重県鳥羽市       | 山本敏哉  |
| 2023 | 26     | 愛知工業大学 自由ヶ丘キャンパス     | 愛知県名古屋市      | 松本嘉孝  |

(敬称略)

## 2023 年度「第 27 回総会」の報告

日時：2024 年 2 月 17 日（土）

場所：愛知工業大学 自由ヶ丘キャンパス

1. 開会・会長挨拶： 松本会長
2. 議長選出
3. 報告事項

- 1) 2023 年度活動報告：大八木事業担当

## 2023 年度事業実施報告

| 活動項目            | 当初計画             | 実施状況   |
|-----------------|------------------|--|
| ニュースレター<br>発行   | 年間 3 号           | 2023 年 3 月 (No. 96)、9 月 (No. 98)、2024 年 1 月 (No. 99) に発行。2024 年 3 月に No. 100 発行予定。   |
| サマースクール         | 夏 1 回実施          | 前年に続き中止。   |
| 談話会             | 年 2 回実施          | 1) 42 回談話会 7/21 (金) 18:00~20:00<br>鎌内 宏光様：水生成物の生態と環境の相互作用の学際的総合理解<br>2) 43 回談話会 12/8 (金) 18:00~20:00<br>吉田 耕治様：東海地方の湧水湿地の水質は、本当に酸性・貧栄養なのか<br>※場所はいずれも相山女学園大学にて実施 |
| 見学会             | 年 1 回実施          | 1) 醸造と水をめぐる見学会 (半田) 2023 年 10 月 5 日, 愛知県半田市 伊東株式会社, 参加人数 9 人<br>2) 矢作川ほかのアユの産卵の観察会 (10 月下旬~11 月上旬) 条件が合わず中止  |
| 市民講座            | 年 1 回実施          | 中止   |
| 助成金             | 総額 5 万円以内で 3 件まで | 2 件の応募。厳正な審査の結果、今回は 2 件に対し総額 10 万円の助成を行うことに決定。   |
| 広報・学会公式<br>HP   |                  | <a href="http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/">http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/</a> に開設。活動状況・予定など随時更新中。Facebook による広報は試験運用中。ML は運用中。                             |
| 総会・研究発表会        | 2 月に実施           | 2024 年 2 月 17, 18 日に実施 (愛知工業大学 自由が丘キャンパス)。<br>※前回研究発表会のプログラム・要旨を web 公開。   |
| 論文集販売           |                  | バックナンバーを 1 冊 2,000 円で頒布  |
| 教科書販売           |                  | 定価 2,600 円を 15% 割引で販売  |
| 学生表彰<br>(優秀発表賞) |                  | 研究発表会終了後に表彰予定 (最優秀 1 名を予定)。  |
| 幹事会の開催          |                  | 幹事会の会合：2 回、メール会議：適宜  |
| 社会貢献活動          |                  | 諏訪湖の第 8 期水質保全計画案に対して意見提出   |
| 会計              |                  | ゆうちょ銀行のネットバンキング化   |

## 2) 2023 年度会計報告：松本会計担当

## 2023 年度予算決算書（2023.01.01～12.31）

| [収入]       |           |           |  |
|------------|-----------|-----------|--|
| 費目         | 2023年予算   | 2023年決算   | 備考   |
| 前年度繰り越し金   | 733,974   | 733,974   |  |
| 会費収入       | 108,000   | 68,000    | 一般2,000円、学生1,000円、家族3,000円、団体4,000円<br>(過年度分7,000円、2023年度分51,000円、前受分12,000円)              |
| 雑収入        | 870,000   | 112,753   | 身近な水の環境科学第2版初刷 300部 印税 56,029円<br>電子版 身近な水の環境科学 2部 印税695円<br>身近な水の環境科第2版2刷 300部 印税 56,029円 |
| 事業費（論文発行）  |           | 280,000   | 4編分  |
| 寄付金        | 0         | 12,025    | 寄付1件（野崎健太郎会員）  |
| 利子         | 1         | 6         |  |
| 総計         | 1,711,975 | 1,206,758 |  |
| [支出]       |           |           |  |
| 費目         | 2023年度予算  | 2023年度決算  | 備考   |
| 郵送料        | 1,000     | 0         |  |
| ニューズレター発行費 | 0         | 0         | ニューズレター送の水の送料（封筒、切手）   |
| 事業費（助成金）   | 150,000   | 100,000   | 助成金2件（50,000円/件）   |
| 事業費（論文発行）  | 800,000   | 299,200   | 論文集印刷代（299,200円）、会員等への郵送料（円）   |
| 広報費        | 25,000    | 5,238     | インターネット、土木学会継続教育(CPD)制度プログラム2回   |
| 雑費         | 10,000    | 13,510    | 振込み手数料 660円、インターネットバンキング用機器（トークン）郵送料<br>825円、論文集郵送料12,025円                                 |
| 予備費        | 712,893   | 0         | 幹事交還費等   |
| 総計         | 1,698,893 | 417,948   | 次年度繰越金788,810円   |

## 3) 2023 年度会計監査報告：内田会計監査

オンラインにて適切に会計処理が行われていることを確認した旨、内田会計監査から説明があった。

## 4) 論文集 2023 年：野崎編集委員長

## 陸の水「論文集」

## 1. 陸の水（論文集）97号（論文集として9冊目、2021-2022年）

2023年4月1日に発行し、同時に支部会 web site で公開した。論文 (Article) 1本、報告 (Report) 4本、意見 (Opinion) 1本を掲載した。

本論文集は、1冊目にあたる43号から筑波大学、京都大学（生態学研究センター）、静岡大学、名古屋大学（農学部）、三重大学、名古屋大学（工学部土木系）、豊田工業高等専門学校、国立国会図書館、国立国会図書館関西館の9施設に寄贈している。

2. 編集状況

R2021/22-03（原著論文）：2021年11月29日受付 審査中（担当編集委員：田代喬さん）。

3. 陸の水（論文集10冊目）2023-2024年

3.1. 原稿締切：2024年8月31日，メーリングリストで投稿をよびかける。

3.2. 発行予定：2025年2月1日。

3.3. 特集：陸の水100号記念

4. 編集委員会の体制

97号（2021-2022年）17名（委員長含む）の体制に，辻 彰洋 博士（国立科学博物館，植物研究部）を追加する。

4. 審議事項

1) 2024年度年度事業計画：大八木事業担当

2024年度事業計画（案）

1. ニュースレター「陸の水」の発行：年間3号

7月（No.101）、12月（No.102）、3月（No.103）

2. 談話会の開催：年間2回（時期未定）

※土木学会継続教育（CPD）制度のプログラム（2.0単位あるいは1.5単位）として実施予定。

3. 見学会の開催：年間2回

・矢作川ほかのアユの産卵の観察会（10月下旬～11月上旬）

・醸造と水をめぐる見学会（第2回）

4. 総会・研究発表会の開催（2月）

5. 一般研究助成（原則2件、助成総額10万円以内。一件当たりの上限は5万円まで）

- 
6. 学生発表賞の授与（研究発表会にて優秀発表者を表彰）
7. 活動報告（HPの更新、ML・研究発表会の要旨の公開）
8. 「陸の水」論文集・教科書販売：  
 ※論文集は2000円、  
 ※教科書『身近な水の環境科学 第2版』は定価2,600円（税別）
9. 社会貢献  
 ※2015年度から実施してきた「御嶽山噴火影響調査」は“地域”活動は休止を検討  
 ※2019年度から、他地域の陸水環境に関する研究と連携し展開する“広域連携”を創設
10. 幹事会の開催（今後の東海支部会の幹事、運営について検討）

2) 次期役員・幹事案：松本会長

#### 次期役員・幹事案

|            |  |           |
|------------|--|-----------|
| 会長         | 松本 嘉孝（豊田工業高等専門学校）  | 転任 9/留年 0 |
| 副会長        | 椿 涼太（名古屋大学）  | 転任 6/留年 0 |
| 庶務担当       | 須田 ひろ実（株式会社ニック環境システム）                                      | 留任 9      |
| 会計担当       | 未定   |           |
| 事業担当       | 大八木 英夫（南山大学）<br>年会・総会（大八木英）<br>談話会 2回（未定）<br>見学会 2回（山本，松本） | 留年 4      |
| 社会貢献(地域)   | 未定   | 留年 4      |
| 社会貢献(広域連携) | 井上 祥一郎（株式会社名邦テクノ）  | 転任 9/留年 6 |
| 陸の水担当      | 岡本 聖矢（自然共生研究センター）  | 新任        |
| 助成金担当      | 未定   |           |
| 広報 HP 担当   | 白金 晶子（矢作川研究所）  | 留年 1      |
| 会計監査       | 内田 臣一（愛知工業大学）  | 転任 8/留年 4 |
| 論文集編集委員長   | 野崎 健太郎（椋山女学園大学）  | 留任 10     |

## 3) 2024年度予算案：松本会計担当

## 2024年度予算案（2024.01.01～12.31）

| [収入]       |           |  |
|------------|-----------|--|
| 費目         | 2024年度予算  | 備考   |
| 前年度繰り越し金   | 788,810   |  |
| 当年度会費収入    | 125,000   | 会員 一般64、学生2、家族1、団体1 = 137,000円*/年<br>※2024年度会費の前受(8会員、家族会員1名：15,000円)により、137,000-15,000=122,000円<br>(備考：4会員から2025年以降の会費前受：17,000円) |
| 過年度分会費収入   | 79,000    | 前年度までの会費徴収（一般39、学生1）   |
| 雑収入        | 70,000    | 論文集・教科書販売（30,000円）、印税（40,000円）   |
| 寄付金        | 0         |  |
| その他        | 6         | 利子   |
| 総計         | 1,062,816 |  |
| [支出]       |           |  |
| 費目         | 2024年度予算  | 備考   |
| 郵送料        | 2,000     | 庶務・会計に係る通信費  |
| ニュースレター発行費 | 0         | ニュースレター陸の水の印刷費、送料（封筒、切手）   |
| 事業費        | 300,000   | 総会等補助、研究助成（2件）、談話会等の講師謝礼、社会貢献、   |
| 広報費        | 35,000    | インターネット、土木学会継続教育(CPD)制度プログラム（3回、1回は2023年分）   |
| 雑費         | 10,000    | 振込み手数料など   |
| その他        | 715,816   | 次回の論文集発行の積立、幹事会交通費等  |
| 総計         | 1,062,816 |  |

## 4) その他

- ・助成報告未完了事案について：江端助成金担当

2018年度 No.1 浜松環境ネットワーク 木下様（当時、戸田先生が助成担当）

年末、年始と複数回、ご本人へ電話したものつながらず、メールにおいても返信なし。戸田先生に2/1に相談のメールをした。

- ・他地域との連携について：井上社会貢献（広域連携）担当

諏訪湖の第8期水質保全計画案に対して意見を述べた。主として技術に関する提言を行い、長野県から結果公表が出た。提出案は事前に「諏訪湖クラブ（沖野外輝夫会長）」の拡大理事会に資料を配布した。

長野県第8期諏訪湖水質保全計画（素案）に対するご意見の募集の結果について HP

[https://www.pref.nagano.lg.jp/mizutaiki/kurashi/shizen/suishitsu/7kisuwakokeikaku/pabukome\\_kekka.html](https://www.pref.nagano.lg.jp/mizutaiki/kurashi/shizen/suishitsu/7kisuwakokeikaku/pabukome_kekka.html)

## 2024年度「研究助成」の募集案内

次年度の研究助成を募集しております。水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他あらゆる探求の取り組みに対して助成を行います。会員以外の方も応募可能ですので、周囲の方々にも周知して頂けると幸いです。

問合せ先：日本陸水学会東海支部会(研究助成担当)

江端 一徳(豊田工業高等専門学校)([ebata@toyota-ct.ac.jp](mailto:ebata@toyota-ct.ac.jp))

小学、中学、高校の部活動など  
からの応募を優先して採択します

アマチュア・若手研究者への調査・研究の奨励

2024年度 日本陸水学会 東海支部会

# 研究助成募集



**趣旨** 日本陸水学会東海支部会では、「水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他のあらゆる探求の取り組み」に対してアマチュア・若手研究者の調査・研究を奨励するために、以下のような研究助成を行います

**助成対象となる調査・研究の分野**  
陸水環境を対象とした自然科学・人文社会科学・環境教育の実践および教材研究など

**募集対象者** アマチュア・若手研究者および研究グループなど

**助成金額** 申請上限5万円で2件の助成を行います  
※5万円分の予算まで申請可能ですが、申請内容に応じて減額して支給する場合があります

**被助成者の義務** 調査・研究は年度内に終了し、その後1年以内に、当支部会研究発表会あるいは、支部会ニュースレター誌上での成果公表をしていただきます

**応募方法** 以下の項目を含んだ申請書類(A4版、手書き可、当支部会様式使用可)を作成してください

- 1) 研究題目、およびキーワード
- 2) 申請者(個人の氏名、またはグループ名)と連絡先
- 3) 調査・研究課題の内容(1000-1200字程度)
- 4) 助成金の支出予算案(項目ごとに千円単位で)  
例: 用品費(備品、消耗品)、調査費(成果発表のための学会・研究会参加旅費を含めても構いませんが、調査費以外は申請総額の1/2を超えないようにしてください)、謝金(アルバイト代)など。※謝金については妥当性のないものは認められません
- 5) 申請代表者の連絡先(電子メール希望の場合はアドレス) 明記のこと

※様式は、 <http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/> からダウンロードできます

**【注意】**

- ・大学、研究機関に所属していない個人・グループ(小中高校の関係者など)を優先します
- ・大学、研究機関に所属する研究者、学生も応募できます
- ・大学(院)生の方は、卒業研究、修士・博士研究の一部内容について申請しても構いません
- ・営利を目的とする調査・研究に対しては助成を行いません
- ・当支部会員でなくても応募できます
- ・応募、採択の機会に、ぜひ当支部会への入会をお願いします

**応募締切** 2024/5/24(金)、(郵送の場合は消印有効)  
※下記まで郵送または電子メールでお申し込みください。

**応募・問い合わせ先**  
日本陸水学会 東海支部会(研究助成担当)  
〒471-8525 愛知県豊田市栄生町2-1  
豊田工業高等専門学校 環境都市工学科 江端一徳(宛)  
E-mail: [ebata@toyota-ct.ac.jp](mailto:ebata@toyota-ct.ac.jp)

## NL100 号の記念記事 「歴代会長からのメッセージ」

### 「陸の水」ニュースレター100号を記念して

日本陸水学会東海支部長 松本嘉孝

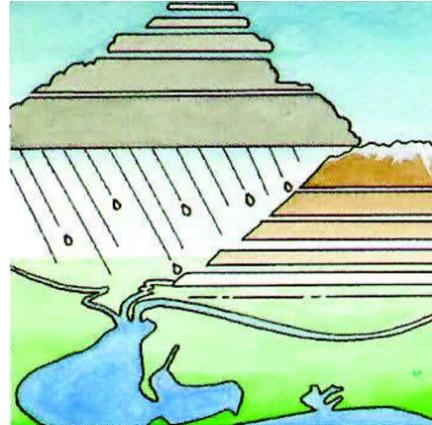
日本陸水学会東海支部の「陸の水」ニュースレターは、令和6年3月に発行100号の節目を迎えます。このニュースレターは支部会設立総会の前の1998年5月に初号が発行され、当時としては珍しい全編カラー刷りでした。その表紙には、中規模な河川で水生昆虫などを採している数名や、川の中で語り合っている様子、河岸で採取した生きものを観察している人々の写真が掲載されており、水辺の現場での観察や議論を重視している本学会の活動が垣間見られます。その学会設立時には、私は所属していませんでしたが（山梨県内大学を休学して放浪し、戻ってきた時期です）、100号を迎えたおよそ24年後でも学会活動の様子を知ることができる点で、このニュースレターの意義を強く感じます。設立当初にニュースレターを発行された先輩会員の皆様、そしてこれまで長きに渡り続けてきた本学会の会員の皆様に心から感謝し、この努力を尊敬します。

この初号には、吉岡崇仁先生（当時名大・大気水圏科学研究所所属）の執筆による、「「陸の水」の編集について」という記事があります。その中で、次の一節があります。「川や湖に関心を持つ東海地方在住の方々に、私たちの活動を知っていただくとともに、陸水学の普及を目的として機関誌（ニュースレター）を作ることになりました。」また後に、「一般の方にもわかりやすい表現となるように努力しますが、研究紹介などでは、専門用語も出てくると思います。これらについては、その都度、「用語解説」の欄を設けたいと思っています。」と述べられています。この学会は専門家に限らず、一般市民や大学生など初学者にも広く門戸を開いており、その方々が陸水学の知識や情報を得る最初のステップがこのニュースレターであったのではないかと推測されます。一般的には「学会」と聞くと、専門家が最先端の議論を交わす場という印象があり、その学会誌も論文の掲載を主目的としています。しかし、この日本陸水学会東海支部の機関誌（ニュースレター）は、陸水学の普及と東海地方の陸水情報の収集・提供を目的としており、学問をわかりやすく広く普及させるメディアであると同時に、コミュニケーションツールとしての役割も果たしています。現在も、各種イベントの案内や後記、各調査地に関する興味深い話題など、その役割を十分になっていると考えます。

今回、「陸の水」ニュースレター100号発行を記念して、令和6年2月17日（土）に、第25回日本陸水学会東海支部研究集会内で、「ニュースレター100号記念 これまでの陸水学会東海支部の活動の振り返りと次世代の学生・研究者へのメッセージ」と題した特別セッションがパネルディスカッション形式で開催されました。当日参加した5名の歴代支部会長から、支部会の歴史や行われてきた活動についての振り返りとともに、次世代へのメッセージが送られました。歴代会長からの寄稿については、本ニュースレター内で一部掲載するほか、次回の「陸の水」論文集でも支部会の歴史とともに掲載される予定です。

最後に「陸の水」ニュースレターの1ページ目左上に毎号掲載されているロゴマークについて、初号からの文章を引用します。このロゴマークが表すかけがえのない東海地区の陸水への想いを胸に、これからもロゴマークにふさわしい学会活動を、会員の手で丁寧に、大切に継続することを誓う次第です。

「ロゴマークは、世話人の紅一点、石田典子さんが引き受けてくださいました（実際は、ご主人の手によるものだそうですが）。見ていただいですぐ（？）わかるように、東海地方を示す伊勢湾・三河湾、木曾三川、浜名湖に、陸水の源である雨をイラストにしたものです。陸水学会東海支部のマークとして、とてもふさわしいものが出来たのではないかと考えています。」（吉岡崇仁、「陸の水」の編集について、陸の水、No.1, p4.）



## 日本陸水学会東海支部会の設立について

八木明彦

日本陸水学会東海支部会の設立のきっかけは、田中阿歌麿先生が1899年8月1日に山中湖で測深した時をもって、その100年に相当する1999年を「日本陸水100年記念」として開催することが決ったことから始まります。

1998年5月に「陸の水、No.1」を刊行（なんとカラーです）し、1998年6月27日に東海支部会設立総会を開催して動き出したのです。そして、1999年3月に第1回研究総会を開きました。

日本陸水学100年記念は公開シンポジウム—身近な水問題と陸水学の取り組み—を1999年10月23日に、名古屋大学大気水圏科学研究所が中心となり企画委員会が設けられ名古屋女子大学を会場として開催されました。ここでは第1部～第5部までのテーマで講演・討論・懇親会が開かれたのです。

一方、東海支部会ではニュースレター「陸の水」を刊行させ、その後、2008年には査読付きの論文集も、「陸の水」の別冊号に取り入れ、発行し、現在に続いています。

さて、陸水学とはどのような学問か？に関しては100年記念公開シンポジウム案内のパンフレットに詳細に紹介され、更には、東海支部会発足に関しては、「陸の水」No.1に、これまた詳しく記載されています。

例えば、

- 日本陸水学会東海支部会へのお誘い・・・・・・・・寺井久慈会員
- 陸水学とは・・・・・・・・八木明彦会員
- ニュースレター「陸の水」の編集について・・・・・・・・吉岡崇仁会員

なお、査読付き論文集の「陸の水」はニュースレター「陸の水」の別冊と

---

して発行し、編集委員長として野崎健太郎会員が継続中です。更に、支部会の活動を振り返るため、陸の水 No.50 には陸水学会東海支部会活動の特徴（第5期会長寺井久慈会員）と日本陸水学会東海支部会の歩み（第1・3・6期会長八木明彦会員）の記事がありますので参考にしてください。

#### 陸水学の普及活動について

支部会の活動の一環としては、次のような行事が実施されています。

※NHK 名古屋文化センター栄教室にて 1998 年から 99 年に、吉岡崇仁会員を中心として、7名の支部会員によって、第一・三月曜日に 13 回分のカリキュラムを設けて、テーマ：陸の水～その環境と生き物～と題して、一般市民を対象に解説したものです。内容は、陸の水・湖の物語り・現地学習（川の生き物観察、名城下水処理場見学、干潟の働き）・農業と水・生活の水・川の浄化作用・水環境を指標とする生き物・上下水の仕組み、21 世紀に干潟を残そう）等です。

※わたしたちの川の“きれいを”測ろう！・・・・村上哲生会員

この行事も陸水学 100 年記念として、行われました（1999 年）。水の濁りを最初に測ったのは、物理・化学学者のファラデーで、テムズ川を蒸気船で航行しながら、白いガードを水に沈めて、それがなくなる深さで表し、なんと 1 インチ（2.54cm）しかなかったことを、このパンフレットでは紹介し、更に、透視度計の作り方、調査の注意点も紹介しました。私も、学生達と 2 時間おきの昼夜観測を行いました。途中で、大雨に遭いましたが、負けずに完了しました。その結果、雨による川の濁りが明瞭に透視度の低下をもたらすことを実感した女子大生の体験でした。また、同様に 2004 年夏には伊勢・三河湾に注ぐ河川河口部の一斉溶存酸素観測（村上哲生会員）も市民参加で実地しました。

※名古屋市天白区に位置（平針）する「里山保全処置を求める要望」のための調査も多く、多くの会員（宗宮弘明会長中心に）と共に 2009 年、凄いヤブ蚊の舞う湿地で、観測をしました（平針の湿地保護、2010 年春）。

※支部会第 1 回の研究発表会

1999 年 3 月 20 日（土）～21 日（日）に岐阜県海津町 海津苑

発表数 15、参加者 36 名、で開催されました。この時から、発表と宿泊は温泉宿にしようと思ったものです。尚、この時点での支部会員は個人 106 名、団体会員 4 件でした。

#### 陸水学へのきっかけ

私は、名古屋工業大学工業教員養成所（3 年制度）を 1967 年 4 月に 21 歳で卒業後、当時、日本陸水学会会員で、また、日本生態学会中部支部会長の務め、奈良女子大学津田松苗先生の下で底生生物を研究していた名古屋女子大学廣正義先生研究室に就職しました。必ず、月 1 回から 2 回は調査に出かけ（飛驒川・木曾川など）、休みはほとんど無く、ほぼ毎日「水の分析」と「公衆衛生学学生実験」の手伝いをしていました。その当時の廣先生は、琵琶湖と奈良県吉野川で国際生物学事業計画（IBP）に参加しており、手伝いの運転手件水質分析として四季毎に参加し、多くの当時陸水学の第一流の先生方の観測姿と会話、調査の手伝いをしながら、陸水学・生態学の面白さを身近に学ぶことが出来たのです。琵琶

湖北湖観測（塩津湾）では、先生方と共に船での観測、宿での分析、食事、寝泊まりし、研究の手ほどきを受け、陸水学への道に進んだきっかけです。先生方には京都大学の森・根来・三浦・川那部・門田・中西の先生方、学生の菅原さん（後の三重大学教授）、長田さん（後の大阪教育大学教授）、更には、岡山大学農業生物研究所の藤井先生、千葉大学の生島先生らが参加されていたのです。

観測の期間で、陸水学の厳しさ（？）を学んだ事件がありました。それは、観測を終了して就寝していたところ、京都大学琵琶湖研究所を出発したボートが途中で時化のために動けなくなり、真夜中に迎えに来てほしいとの連絡があり、急ぎよ、今津港まで自動車で行ったことがありました。勿論、次の早朝から観測です。これも、陸水学研究の面白さの一環とっていました。

その後、女子大で働きながら、名古屋工業大学 2 部に編入・卒業し、昭和 47 年に、「水の研究」をより深く知りたいとして、中部地方の陸水学創設である名古屋大学菅原健教授とも交流があった広先生より、名古屋大学水質研究施設の西條八束研究室を紹介され、国内留学生として、西條先生と坂本充先生の講義・研究の指導を受けました。このつながりで、「陸水学の研究、水圏代謝」の分野に進んだのです。

参考文献 パンフレットなども有り、タイトル・著者の書き方は論文とは異なります。

- 1 パンフレット 日本陸水学 100 年記念公開シンポジウム テーマ:身近な水問題と陸水学の取り組み、とき:1999 年 10 月 23 日、ところ:名古屋女子大学、主催:日本陸水学会・日本陸水学 100 年記念事業企画委員会。
- 2 日本陸水学会・日本陸水学 100 年記念事業企画委員会 (1999): 日本陸水学 100 年記念公開シンポジウム テーマ:身近な水問題と陸水学の取り組み、p19。
- 3 日本陸水学会東海支部会 (1998): 陸の水 No.1、p 4。
- 4 パンフレット NHK 名古屋文化センター栄教室 (第 1・3 土曜日): 陸の水、～その環境と生き物。
- 5 パンフレット 日本陸水学会東海支部会 (1999): わたしたちの川の“きれい”を測ろう! 陸水観測 100 周年記念事業 木曾三川一斉観測マニュアル、p 4。
- 6 日本陸水学会東海支部会 (1998): 第 1 回研究発表会 要旨集、岐阜県海津町 海津苑、p 19。
- 7 日本陸水学会東海支部会 (2011): 陸の水 No.50 記念特集、陸の水 No.50。
- 8 門司正三 (1964): 科学。12 月号 P630-P684。これは、国際生物学事業計画 (IBP) について 意見と協力を求める、著書の森 主一氏の解説を取り上げている。
- 9 陸水生物生産測定方法論研究会 代表森主一 (1969): 陸水生物研究法、講談社 p505。

## 技術者の東海支部会会長を務めて

井上 祥一郎

理由も定かではない中、T氏から会長就任を打診された。研究者でない私に要請がきたのにはそれなりの背景があった筈である。それについては特に詮索する気にならなかったし、事務局体制がしっかりしていたので、お役に立てるのであればとお引き受けした。出身大学が同じ研究者N氏の推薦であろうという気安さもあった。

私が東海支部会活動に極力参加するようになったのは、名古屋に戻ってからすぐ“ため池の自然研究会”に入会后、暫く経った頃だから25,6年前のことだと思うが定かではない。論文投稿でもしていれば時期は明確だと思うが、記憶にはっきり残っているのが、2012年9月14日～17日、日本陸水学会第77大会名古屋大会が名古屋大学で開催された際、食品会社を回っておつまみの寄付をお願いしたことで、それからでも12年になる。

会長の時は事務局に支えて貰って無事に任期を終えたが、東海地域に限定しない、地域貢献（広域）担当幹事の立場を作って貰い活動を継続中。活動の足場が、松江市、近江八幡市、母校信州大学農学部のある南箕輪村にあるので、宍道湖、中海、琵琶湖、西の湖、諏訪湖に、月1～2回各地に出掛けている。これらの湖は、2018年10月に茨城県霞ヶ浦で開催された第7回世界湖沼会議の折に、豊かな湖回復のためにと設立された“自治体連携”の対象湖である。技術者として経験が生かせる絶好の舞台ができた。

最近“水清ければ魚棲まず”を聞くことが多い。故横浜康継さんの口癖“光は（藻類の）ご飯”が基本、すなわち透明度は大切との考えは変わらない。海外の養殖池における透明度比較データが、澄んだ池の生態系の豊かさを示していた。豊かな湖の条件の一つが、“澄んだ”であろう。水の透明度を上げるための技術に、昔の緩速ろ過法、今の“生物浄化法”がある。陸水学で検証できる技術である。

更に、豊かな湖で避けるべき事象は硫化水素の発生、次いで貧酸素化である。硫化水素による水中生物への影響は、底泥を揚げてばっ気して得られる赤鉄鉱の撒き戻し散布で無毒化され解消される。酸素を持つ赤鉄鉱の存在は自然界でプラスの作用が多い。

富栄養化は、淡水湖で藍藻類アオコの発生、海で（渦）鞭毛藻赤潮の発生が豊かさを阻害してきた。藍藻も渦鞭毛藻も水中生物の餌料としては不適で、好適藻は“ケイ藻”とされる。過去、水中の窒素とリンだけに着目してきたが、ケイ藻は“シリカ（ケイ酸、ケイ素ともいう）”の殻を持ちシリカが不可欠。窒素、リンとケイ素をバランスよく含むかどうかは重要観察項目である。ヘドロはかつて“骸泥”と呼ばれた。骸泥はケイ藻殻の堆積物で、地上に出ると珪藻土になった。陸水学と技術の縁が切れないことがお判り頂けたと思う。

## 日本陸水学会東海支部会の見学会と サマースクールの歴史と個人的な展望

宗宮 弘明

東海支部会のホームページに陸水見学会の項目は存在するが、そこには2008年の徳山ダム見学が記載されているだけであった。そこで、「ニューズレター陸の水」を見て、見学会の実施一覧の表を作成した（表1参照）。サマースクールに関しては、第1回（2004）～15回（2018）までの詳細な報告がホームページに記載されている。その記録を元に、パンデミックで中止となったものを含めてサマースクール実施の一覧表を新たに作成した（表2参照）。

1) 見学会の歴史（表1参照）：見学会は原則的に研究発表会・総会の後に行われてきた。

1999.3.20-21. 第1回研究発表会、第2回総会（岐阜県海津町）の後、3.21に第1回見学会（木曾三川と建設省自然共生河川研）を行った。その後、順調に毎年研究発表会、総会の後に行ってきたが2002-4年度は実施されなかった。2005年度に見学会は復活されその年に2回実施された。その後は、パンデミックの影響を受けて、2020-2022年度の3回の見学会は中止となった。2023年度第26回発表会後の見学会は中止となったが、コロナパンデミックの終息に合わせて、2023.10.5(木)に第1回の醸造と水をめぐる新たな見学会が復活した。2024年度は、第2回目の醸造と水をめぐる見学会を予定されている。

2) サマースクールの歴史（表2参照）。

2004年度の寺井会長時代に「陸水に親しみ陸水学の基礎（初歩）を学ぶ」目的で第1回サマースクールは開始された（陸の水21～18号参照）。その後順調に第16回（2019）まで回を重ねたが、パンデミックの影響で4年間（2020-2023年）の中止となった。今年（2024）は再会の予定である。

3) 見学会とサマースクールへの個人的な展望

私は都市の中にある、偶然にも開発を逃れた里山の保全活動を行う中で、東海支部会との関係をもつようになりました。他の多くの学会とは違い、陸水学会東海支部会の特徴は、その会員相互の親密性にあると個人的には思っています。今回、久しぶりに研究発表会に出席し、そのことが再確認できました。ただ、当然のことですが支部会創設時の会員の方々の参加が限定的でした。支部会創設（1998、陸の水3～1号参照）から、約37年も過ぎたので当然のことでもあります。その意味では、本年度（2023）の研究発表会における特別企画セッション「ニューズレター100号記念 これまでの陸水学会東海支部の活動の振り返りと次世代の学生・研究者へのメッセージ」はタイミングとしては時期に適ったものでした。

これを機会に、今までの見学会、サマースクールを反省するとともに、実施した見学場所の中から、中部地区の陸水学の展開に重要な場所を議論し選定する

プロジェクトを立ち上げてはどうでしょうか。もちろん、楽しみながら選定し、今後の見学会に活かしてゆくことが大事なことになるでしょう。十年ぶりに研究発表会に参加する中でこんなことを考えました。

また、気候変動を含めて地球環境の破壊が危機的なレベルで進行する中、ガザ、ウクライナ、スーダンなどで戦争が拡大し人権が蔑ろにされる状況が起きています。平和な社会を作るといふ、学問論の基礎を押さえながら支部会を発展させる必要を痛感しています。

最近、アフガニスタンで用水路建設に努力した「医師中村哲の仕事・働くということ」という記録映画（DVD 発売中）を観ました。沢山の患者を診る中で、水不足と食糧不足のために患者が死亡することに気がついた中村哲医師は、砂漠地帯に用水路を作ることを決心したのです。用水路の完成(2010:マルワリード用水路完成)の後には、水不足と食糧不足による患者は減り、村には安全と平和が訪れました。「用水路には大人も子どもも集まりましたが、動物や鳥もやってきました。植物が育ったことで虫たちも増えました。中村先生はその様子を見て『男も女も子どもも動物も、昆虫も鳥もみんな喜んで。やっぱり命というのは水が元手なんだなあ』・・・としみじみ」思ったそうです（松原恵利子「中村哲物語」汐文社 2022, p169）。この映画を観て「陸水」が大きな意味で、「食糧と水」の安心と安全に関与する学問だと確信できました。この映画は、「陸水」の勧めでもあると思いました。混迷な時代であるからこそ、現実を目を背けることなく、本を正確に読み、理論を鍛えたいと思う今日この頃です。

#### 表 1. 見学会（エクスカージョン＝体験型見学会）

- 2023 年度第 26 回発表会後の見学会中止 第 1 回醸造と水をめぐる見学会  
2023.10.5(木)（半田市、伊東株式会社）（陸の水：99）
- 2022 年度第 25 回発表会後中止、 2021 年度第 24 回発表会後中止、 2020 年度第 23 回発表会後の見学会中止
- 2019 年度第 22 回研究発表会（新城市やまびこの丘）後、2020.2.16(日) 設楽ダム工事現場見学（市野和夫 元愛知大学）（陸の水：85）
- 2018 年度第 21 回研究発表会（蒲郡市生命の海科学館）後、2019.2.17(日) 生命の海科学館と竹島水族館見学（戸田三津夫 静岡大）（陸の水：82）
- 2017 年度第 20 回研究発表会(木曾町木曾郡民会館)後、2018.2.18(日) 京都大学木曾生物学研究所見学（野崎健太郎 椋山女学園大）（陸の水：78）
- 2016 年度第 19 回研究発表会(湯の山ロッジ)後、2017.2.12(日)三滝川の伏流水が湧き出る池周辺見学(野崎健太郎 椋山女学園大)(陸の水：75)
- 2015 年度第 18 回研究発表会(長野県王滝村公民館滝旅館)後、2016.2.28(日)御嶽山周辺の河川、濁川と王滝川や自然湖見学(陸の水：72)
- 2014 年度第 17 回研究発表会(東海大学社会教育センター三保研修館)の後、2015.2.22(日)海洋科学博物館 自然史博物館を見学(陸の水：68)
- 2013 年度第 16 回研究発表会(三重県鳥羽市答志島民宿寿々波)後、2014.2.23 鳥羽水族館バックヤード見学(戸田三津夫 静岡大)(陸の水：63)
- 2012 年度第 15 回研究発表会(佐久島民宿さざなみ西尾市一色町) 後、2013.2.10 佐久島の海岸での島民の保全活動を見学(陸の水：58)
- 2011 年度第 14 回研究発表会(静岡大上阿多古演習林 浜松市天竜区)後、2012.2.19 阿

- 多古川と佐久間ダム堆砂見学(陸の水：53)
- 2010 年度第 13 回研究発表会(阿南少年自然の家 長野県下伊那郡阿南町)後、  
2011.2.20 深見池と八木研サテライトラボの見学(陸の水：49)
- 2009 年度第 12 回研究発表会 2010.2.20-21(恵那市観月荘) 後の見学会はなかった(陸  
の水 44)
- 研究発表会とは別に見学会 2009.9.5(日)“平針の里山” の調査と見学を実施  
(陸の水 44 の p 2)。(事業実施の報告表より) 報告を名古屋市に提出。
- 2008 年度第 11 回研究発表会 2009.2.21-22(名古屋市内の愛知県青年会館) 後の見学  
会はなかった(陸の水 39) 08.11.16 に徳山ダムの見学 (報告は HP 参照)
- 2007 年度第 10 回研究発表会(静岡県立森林公園の森の家)後の見学会はなかった(陸  
の水 35)
- 研究発表会とは別に見学会 2007.12.2(日)“豊田市自然観察の森” 報告は陸の  
水 34。
- 2006 年度第 9 回研究発表会 (豊田市旭支所、生涯学習センター) の後の見学会はな  
かった(陸の水 31)
- 研究発表会とは別に見学会 2006.11.11(土) “愛知県日進市のため池や東部丘  
陵を見る”鶴思慕池、菊水の滝”(雨で中止) 下見の報告は陸の水 30。
- 2005 年度第 8 回研究発表会(せせらぎ街道の宿たかお 郡上市八幡町)の後 2006.3.12  
に見学会 郡上の街中の水環境散策(陸の水 27)
- 研究発表会とは別に見学会 2005.11.5(土) 自然共生研究センター・世界淡水魚  
園アクアトトぎふ見学会(陸の水 26)。
- 2004 年度第 7 回研究発表会(鶴巻荘 下伊那郡阿智村) の後 見学会実施しなかつた  
が、復活したい(陸の水 23)
- 2003 年度第 6 回研究発表会(四日市大学 四日市) の後 2004.3.27 に見学会 (エクス  
カーション) なし(陸の水 17p 2)
- 2002 年度第 5 回研究発表会(高田青少年会館 津市一身田町) の後 2003.4.27 に見学  
会予定していたが、なかった。(陸の水：16)
- 2001 年度第 4 回研究発表会(サンヒルズ三河湾 蒲郡市三谷町)の後、2002.3.24 愛知  
県水産試験場見学(陸の水：15)
- 2000 年度第 3 回研究発表会(希望荘 三重県菟野町湯の山)の後 2001.3.25 四日市市  
郊外の智積養水(名水百選)とその水源蟹池、県保健環境研(陸の水 12)
- 1999 年度第 2 回研究発表会(岐阜県婦人会館 岐阜市)の後、2000.3.25 岐阜県保健環  
境研究所見学 (寺井久慈 名大) (陸の水：9)
- 1998 年度第 1 回研究発表会(海津苑 岐阜県海津町)の後、1999.3.21 木曾三川と建設  
省自然共生河川研究所 (寺井久慈 名大) (陸の水：6)

## 表 2. サマースクール (SS)

- 2024 SS、サマースクール再開の予定
- 2023 SS 中止、2022 SS 中止、2021 SS 中止、2020 SS 中止、予定は下呂の水産試験場で  
あった
- 2019 SSno.16: Sept 21-22, 農村文化継承館と黒部ダム(富山県黒部市宇奈月：古民家での  
昔の生活体験と日本一のダム見学)戸田三津夫(静岡大) 椿涼太(名大) 陸の水 84

- 
- 2018 SSno.15: Aug 25-26, 阿多古川周辺(浜松市天竜区 生物観察 ヘボ追い、川遊びと鍾乳洞：竜ヶ洞見学) 新實智嗣(水地盤研) **陸の水 81** ここまで HP に記録あり
- 2017 SSno.14: Aug 26-27, 表浜まるごと博物館(愛知県豊橋市寺沢町と田原市周辺：博物館と人と海のつながりを学ぶ)田中延亮・佐藤貴紀(東大生態水文学研究所) **陸 77**
- 2016 SSno.13: Aug 27-28, 瀬戸市東大生態水文学研究所 赤津研究林(森のいろいろな機能を測ってみよう) 田中延亮・佐藤貴紀(東大生態水文学研究所) **陸の水 73**
- 2015 SSno.12: Aug 29-30, 矢作川市流足助川(愛知県 豊田市 足助川周辺の自然観察会) 山本敏哉(矢作川研究所)、高橋聡(金城学院大) **陸の水 71**
- 2014 SSno.11: Aug 30-31, 琵琶湖流入河川(高島市 琵琶湖の辺りで生き物観察 魚類を中心に)と琵琶湖博物館(草津市) 小野田幸生(土木研究所) 新實智嗣(水地盤研)**陸 66**
- 2013 SSno.10: Aug 31-Sep 1, 中池見湿地(福井県敦賀市)と三方五湖(三方郡美浜町、若狭町：湿地と三方五湖に学ぶ) 笹木智恵子(NPO ウェットランド中池見) **陸 61**
- 2012 SSno.9: Sept 15 (日本陸水学会第 77 回大会エクスカージョンを担当) **陸の水 56** 以下の 3 コース
- コース 1) 内田臣一と行く矢作川水利用の旅(越戸ダム 水辺公園矢作大橋のオオカナダモ 明治用水)内田臣一(愛工大) 山本敏哉 内田朝子 白金晶子(矢作川研究所)
- コース 2) 富田啓介と行く東海丘陵湧水湿地の旅(東部丘陵湿地 愛知県芸術大付近の湧水 海上の森) 富田啓介(名大) 新實智嗣(水地盤研) 松本嘉孝(豊田高専)
- コース 3) 村上哲生と行く長良川河口堰開門の旅(河口堰 堰下流 上流 自然共生研センター)村上哲生(名女大)井上祥一郎(伊勢三河)田中庸夫(元愛知県)萱場祐一(土木研)
- 2011 SSno.8: Aug 27-28, 静岡西部水域(天竜川 浜名湖 佐鳴湖見学 ウミガメ放流)長尾邦弘(浜松土木)辻野兼範(県浜松北高)高橋和彦(県農技研)秋山雄司(天竜漁協)**陸 51**
- 2010 SSno.7: Aug 28-29, 櫛田川下流域(三重県松坂市 水田の水利用、魚の捕獲) 皆川明子(農村工学研)北村惇一(NPO 流域環境保全ネットワーク) **陸の水 46**
- 2009 SSno.6: Aug 29-30, 坂折棚田と溪流(岐阜県恵那市里山体験:景観と生物) 相田明(県国際園芸アカデミー)・池谷幸樹(水族館アクアトトぎふ) **陸の水 41**
- 2008 SSno.5: Aug 23-24, 牧田川と周辺の里山(岐阜県上石津町 家族で環境教育：里山と溪流) 田端英雄(応用里山研)・鷺見哲也(大同工大)・佐川志郎(土木研) **陸 37**
- 2007 SSno.4: Aug 25-26, 銚子川(三重県紀北町 子供と大人の川遊び：家族で環境教育) 中根耕造&中田良政(矢作川天然アユ調査会) **陸の水 33**
- 2006 SSno.3: Sept 2-3, 奥矢作勤労青少年レクリエーションセンター(岐阜県恵那市 森と川：森林が持つ緑のダム機能を調べよう) 洲崎澄子(矢作川研究所) **陸の水 29**
- 2005 SSno.2: July 30-31, 入鹿荘(愛知県犬山市入鹿池) 村上哲生(名古屋女子大) **陸の水 25**
- 2004 SSno.1: Nov.2-3, 中部大恵那研修センター(岐阜県恵那市土岐川) 寺井久慈(中部大) **陸の水 21**

※資料収集および記載 宗宮弘明

## 陸水学の教科書編集について

寺井 久慈

田中阿歌麿が 1899 年に山中湖の測深をして日本の陸水学が始まった時から 100 年を迎えるに当たり、記念イベントなどを企画するために東海地方の陸水学関係者で 1998 年に陸水学会東海支部会を発足させた。

今から 25 年前のことである。その頃までは、まだ国公立大学に陸水学の拠点となる研究室が存在していて、講座制が残る中で陸水学の継承が行われていた。その中で育った研究者が全国の国公立・私立大学、自治体研究機関等に就職して陸水学を活用して幅広く水環境問題に取り組んでいた。しかしこの間、大学組織の再編や法人化などにより陸水学の学問的拠点となる講座は各地で改組され陸水研究が縮小されて行った。ちなみに、1914 年設立の京都大学附属大津臨湖実験所は 1991 年に生態学研究センターに改組され、2001 年には大部門制となり 2004 年に法人化されている。また、1954 年に施設として発足し、1965 年に設置された信州大学附属諏訪臨湖実験所は 1996 年に寄付を受けて木崎湖分室を設置したが、2001 年に山地水環境教育研究センターに改組されている。名古屋大学理学部で 1957 年に設立された水質科学研究施設は、菅原健の努力により 1973 年に名古屋大学附属水圏科学研究所として発足し、1993 年に大気水圏科学研究所に改組されたが、2001 年には総合地球環境研究所設立により消滅した。

20 世紀末から 21 世紀初めにかけて、このように陸水研究機関が規模縮小、消滅する状況は世界的な潮流でもあった。1891 年に北ドイツの Ploen に生物学実験所として設立された、世界最古の臨湖実験所であるマックスプランク陸水研究所は 2007 年には進化生物学研究所に改組されて陸水研究機関としては消滅した。

このように陸水学の研究拠点が縮小・消滅して行く一方で、陸水研究者は各地の公私立大学や研究機関に分散することで、小規模ながら陸水研究に取り組み、図らずも学生や若手研究者を育てて行く役割を担うことになった。

このような状況の中で、2001 年に私自身も名古屋大学大気水圏科学研究所から放り出されることとなったが、運良く私学に新設された応用生物学部に転職することが出来た。

ここで担当した授業科目としては、基礎地学、生物科学、環境化学、環境微生物学、地球科学などで、実験科目としての水圏環境実験以外では直接陸水学そのものに関わるものではなかった。しかし、4 年生のゼミや大学院の授業としては、具体的な環境問題を掘り下げるためにも陸水について系統的に教育することが望ましく思われた。

そこで必要性を感じたのが、学生自身が手元に置いて勉強できる適当な陸水学の教科書であった。当時は陸水学の日本語での教科書としては、吉村信吉の「湖沼学」改訂増補版とか A・J・ホーン&C・R・ゴールドマン著（手塚泰彦訳）「陸水学」くらいしかなく、いずれも大部で学生各自に購入させられるものではなか

った。そこでその頃同じ悩みを持っていた日本陸水学会東海支部のメンバーが分かり易い陸水学の教科書を作ろうということで意気投合した経緯がある。

陸水学は陸域に存在する水域に関わる総合科学として主に河川や湖沼を研究対象とするものです。水そのものの動き、水中の溶存・懸濁物質の変化・動態、水中の動植物や微生物の生態などの調査・研究を通じて水域の汚染や富栄養化など環境問題に関わらざるを得ない学問でもあります。1990年代から2000年代にかけて、東海地域では水の環境問題として長良川河口堰建設、藤前干潟埋め立て、中部空港島建設などの公共事業問題や2000年東海豪雨などの災害問題が目白押しの状況でした。すなわち陸水学の出番でもあり、このような中で水の環境問題を考えるための教科書を作るのは時宜にかなったものでもあったわけです。

教科書の編集出版を考えた2004年時点では、陸水学会東海支部で活動するとともに大学で水環境に関わる授業を担当していた4~5人で執筆する予定であったが、陸水学プロパーの大学教員に限られていた。出版書を大学の学生用教科書としてのみではなく、水の環境問題に関心を持つ一般市民にも読んで戴けるものとするために、執筆者の範囲を拡大することを検討した。すなわち理学的研究者に限られていたところに河川工学や農学、魚類生態学などの研究者を加えて、さらに農業や上下水道技術者も執筆陣に追加することとした。

このために出版・発行が5年も延びて2010年1月となった。私個人としてこの教科書が使用できたのは大学退職前の1年間に限られてしまったが、ゼミでの学生指導に活用できたことに大変満足している。

陸水学の教科書としては通常、湖沼の熱収支、水温躍層から化学成層に展開する。しかし、この教科書は東海地方に研究対象となる湖沼が少なく河川の上流・下流で問題が多いことから、コンセプトとして河川の「一源流域から河口まで—「身近な水の環境科学」」とした。我田引水となるかも知れないが、私個人としても土岐川・庄内川上流域から河口の藤前干潟までを研究対象としてきたことから実地に学生指導する上でも申し分ない教科書となった。更に付言すれば、教科書に直接盛り込めない内容として、藤前干潟の環境アセスや中部空港島埋め立ての問題点などについて「コラム」に書き残せたことは有難く思っている。

## 御嶽調査研究

谷口智雅

長野県と岐阜県にまたがる御嶽山が2014年9月27日に水蒸気爆発を引き起こし、噴火や火山灰による河川水質や生態系への影響が危惧された。インパクトのある火山災害であったことから、支部会メンバーの関心も高く、2014年12月20日(日)に有志5名による王滝川上流域での巡検が実施された。支部会では、東

海地区（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県）における陸水学の進歩と普及を図ることを目的とした学術団体として、研究発表会や論文集の刊行等の学術研究を実施するとともに、水質一斉調査、サマースクール、テキストを刊行など陸水学の普及にも力を入れてきた。さらに、学術団体としての社会的責任を果たすための議論・検討も行なってきた。御嶽山南麓の王滝川は東海地区ではなく長野県となるが、木曾川の上流域にあたり、愛知用水の水源でもある牧尾ダムもあり、流域や水利用の観点からは東海地区に大きく関わりがある。このため、御嶽山における調査研究は、支部会あるいは陸水学が社会的な貢献を果たす重点的な活動の一つとしても位置付けられるものであり、2014年9月27日に噴火した御嶽山の陸水環境への影響の実態調査に取り組むこととした。当時支部会長であった筆者は、2015年2月に開催された2014年度第18回総会の総会にて事業実施計画と担当幹事の就任を提案し、支部会として正式に取り組むことが決定された。2015年4月には、名古屋大学の減災館において、「2014年9月27日御嶽山噴火が水環境に及ぼす影響」をテーマとした第27回東海陸水談話会も開催された。

学会や支部会は、学術大会での研究結果の発表や学術誌への論文投稿など成果を示す場であるとともに、会員間の情報や意見交換の場であるとともに学びの場でもある。陸水学は、陸域に存在する水の総合科学であり、物理・化学・生物・地学・地理学などの様々な分野からのアプローチがあり、自然科学のみならず人文社会科学からの視点での調査・分析もされている。学問の専門性の細密化と技術の進歩によって、学会の細分化や一つの学会内でも分野や調査対象によって別会場で発表プログラムが実施される場合も多い。しかし、支部会はコンパクトな集まりとして、年一度の研究発表大会も二日間にわたって一つの会場で行われている。このため、理学・工学・農学・教育学・文学など様々な分野の内容に触れられる貴重な機会となっている。ポスター発表などは様々な分野の成果に触れる機会となっているが、口頭発表については、やはり自身が専攻する分野や関心のテーマが優先となってしまう。支部会の研究発表大会は、卒論発表や大学教員の新たな取り組みや研究の示唆的発表もあり、様々な観点からの学びと情報を得られる良い場になっていると言える。発表についてうまく説明できるか、研究の妥当性を認められるかなどの不安や緊張は当然あるが、和やかに雰囲気の中で学び、交流のできるのもこの支部会の良さであろう。

このような成果の発表や学びの場である支部会は、学術団体として研究に取り組むことも大切である。様々な分野に渡る会員を有し、積極的な交流が図られている支部会が、陸域に存在する水の総合科学である陸水学に関する共同研究を行うことは大変有意義と言える。筆者が学位取得後から10数年経った時に学会の懇親会の場で指導を頂いた先生から、ある程度研究を進めて来たら共同研究を首謀したり関わったりすることも大切であり、指導の先生も共同研究は直に他の研究に触れることのでき、大変に勉強になったとの話を聞かせて頂いた。色々大変なこともあるが、楽しいこともあったこととを嬉しそうに話して頂いた。そして、学会はそのような機会を与えてくるものであり、そのような取り組みをすることも重要であるとともに、共同研究が実施されることが望ましいとの思いと行われてないことに対する叱咤と激励を頂きました。共同研究を実施するにあたり、科研費を含む外部資金の獲得は重要であり、自身としては、力量も不十分であり、なかなかそのような機会が作れずいたが、支部会のメンバーとそのようなきっか

けが得られたこと嬉しく思ったことが思い出される。

自身の力不足は変わらずではあるが、支部会メンバーに助けられ 2014 年 9 月の御嶽山の噴火後より、共同研究がスタートし、その後おかげさまで支部会の本研究グループとして外部資金も獲得できた。WEC 応用生態研究助成 3 件 (2015-16 年度代表:野崎健太郎氏、2016-17 年度代表:松本嘉孝氏、2020-2021 年度代表:宇佐見亜希子氏) に加え、科研費基盤研究 B (2019-22 年度代表:田代喬氏) などのもと、活発的な調査・研究を支部会のメンバーを中心に実施できたことを改めて感謝したい。これらの発表成果についても、日本陸水学会東海支部会や日本水環境学会などでの継続的な口頭公表や学会内での特別セッション (課題講演; 2017 年 9 月日本陸水学会、2021 年 9 月日本陸水学会)、研究集会 (2018 年 9 月応用生態工学会、2021 年 9 月応用生態工学会)、Special Session (2018 年 3 月 8th EAFES) の開催も多く研究者との交流し、さらなる情報を交換する素となった。さらに、調査地域との関係も、御嶽山の調査地の一部が御嶽山麓の国有林内に位置していることから林野庁木曾森林管理署による入林許可を始め、地元王滝町村での 2016 年 2 月、2018 年 2 月に調査報告会 (日本陸水学会東海支部会研究発表会の一環) の実施や「村誌王滝: 自然編」(2017 年 3 月) 発行にも資料提供として協力するなど、研究成果の地域還元も少しは図られたかと思う。また、各種機関との情報交換および連携も行われる名古屋大学大学院環境学研究科付属地震火山センターが行う御嶽山に関係する機関 (国土交通省・気象庁・長野県・市町村) が集まる火山研究施設懇談会にも支部会として参加させて頂いている。

一つのきっかけからネットワークが広がり、開始当初より分野の幅が広がった御嶽山研究。火山地域である御嶽山研究には自然科学の側面や文化・社会的な側面でまだまだ魅力的なテーマがあり、この地域での取り組みを継続するとともに、火山地域にとどまらず新たな地域や課題での共同研究が行われることを期待している。そして、老若男女問わず支部会のメンバーとまた一緒に活発的な共同研究が実施できることを楽しみにしたい。

## 陸の水論文集—東海地方の陸水学を楽しむ—

野崎健太郎

陸の水論文集は、2008 年の日本陸水学会東海支部会の設立 10 周年を契機に始まった。2006 年～2007 年度に支部会長を務めた筆者は、その公約の 1 つとして 10 周年記念論文集の発行を挙げていた。この企画の立ち上げには、支部会設立に尽力された西條八先生が 2007 年 10 月 9 日に永眠されたこと、そして設立時からの会員であった神谷知子先生 (四日市大学短期大学部)、田中庸央先生 (愛知県環境調査センター/愛研) が定年退職を迎えられ、3 先生の完全な著作目録を残したいという思いを込めていた。これは、学者の生き様を示す著作目録が陸水学研究の重要な資料の 1 つとなると考えていたからである。2008 年 2 月に行われた第 11 回研究発表会・総会 (浜松市、静岡県立森林公園森の家) で筆者が編集委員長に選出され、編集作業に取り掛かった。

当初は定期的な刊行を想定していなかったため、論文集としての名称はつけず、ニューズレター誌として発行されていた「陸の水」に位置付けることにした。その結果、論文集の1冊目は「陸の水43号」として、12本の論文と3本の著作目録を掲載して2010年1月に発行された。この時に、筆者の知識不足から、No. 43（43号）ではなく、Vol. 43（43巻）と誤表記したことによって、それ以降の陸の水の巻号の不一致が生じてしまった。出版費用の捻出も大きな課題となり、寄付を呼び掛けたところ、11名の会員から支援をいただいたことは望外の喜びであった。

さて筆者自身は、論文集を続けるつもりはなかったため、43号には投稿・執筆規程を設けず、陸水学雑誌の規程を利用していた。そして公約を果たし安堵していたところ、村上哲生さん（名古屋女子大学/中部大学）が、「これからも論文集を発行するべきだ。私費でも発行しよう。」と主張し、編集委員長を引き受けて下さった。総会では年1回の刊行が提案され、承認となった。個人的には、出版費用の確保が困難なことから、かつて国際理論応用陸水学会議（The International Society of Limnology: SIL）が3年に1回の大会（Meeting）時に発行していた論文集（Proceedings）を参考に、3年から5年の間隔で発行してはどうかと提案したが、村上さんの強い意欲に押し切られた。

2冊目の論文集は、「陸の水48号」として、論文3本、新設された資料1本、そして村上哲生さんが企画した2つの特集を掲載し2011年3月に発行された。特集は、日本の陸水学の1つの拠点であった名古屋大学水圏科学研究所第5部門（水圏物質代謝部門）の歴史と寺井久慈会員の著作目録、そして東海地方の陸水学を推し進めた2つの地方自治体研究所、愛知県環境調査センター、名古屋市環境科学研究所の歴史が綴られた。この特集は、自身も地方自治体の研究機関に所属されていた村上さんの熱い気持ちが伝わるもので、東海支部会ならでは企画であった。ぜひ特集前文（村上，2011，陸の水48:31）をお読みいただき、その思い、研究哲学を感じ取っていただきたい。

その後、3冊目の54号（2012年）から最新の10冊目97号（2023年）までは筆者が編集委員長を務め、現在は11冊目（2024年度発行予定）の編集に取り掛かっている。80号（2018年）からは支部会財政を考慮し2年に1回の発行、そして公的な研究費を利用できる著者からは出版支援費（掲載費）をいただくようになり、出版費用の課題は解決しつつある。これらの過程についても、次の機会に紹介させていただく。図1は、これまでに発行された10冊の論文集の頁数、図2は記事の数を示している。本稿ではこの結果のみを提示させていただく。現在、多くの学術雑誌は電子出版のみとなり、冊子を印刷配布する形態は消えつつある。陸の水論文集も全ての記事を支部会 web site 上で公開している。しかしながら、陸の水論文集は、今後も冊子を印刷し会員への配布、6校の大学図書館への寄贈を維持していきたい。これは電子体という仮想空間にのみ論文という実体を置くことへの危惧である。紙を中心とした印刷物の耐久性は歴史の裏付けがあるが、電子体の耐久性は未知数である。どちらの形態にも一長一短はある。多様性の時代であればこそ、2つの形態を維持することが好ましいと考えている。

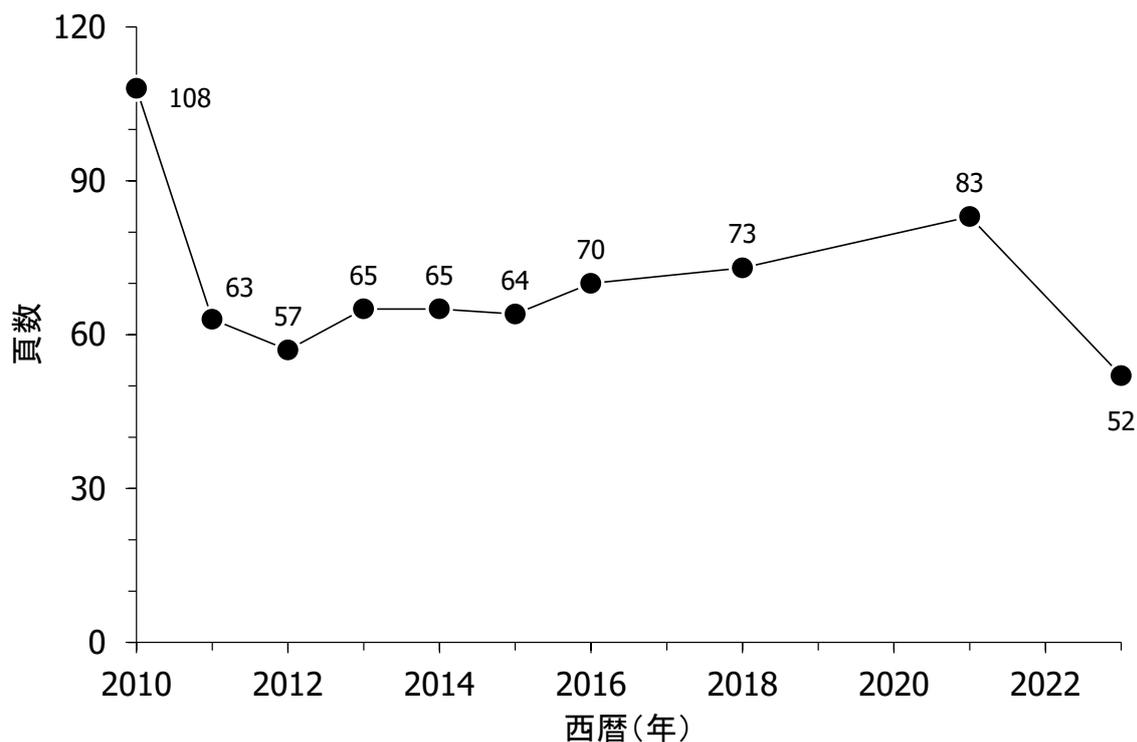


図 1. 陸の水論文集 1 冊目から 10 冊目の頁数の推移.

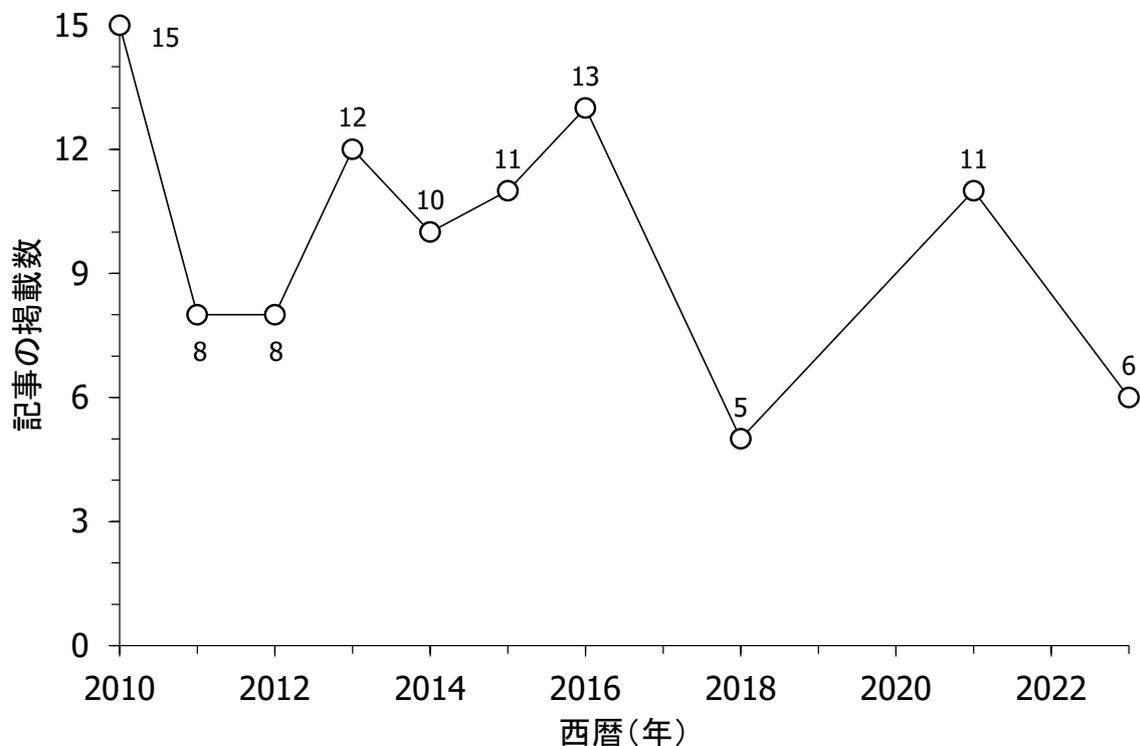


図 2. 陸の水論文集 1 冊目から 10 冊目に掲載された記事の数の推移.

---

最後に、論文集の番号付けについての課題を紹介する。前述のとおり、陸の水論文集は定期刊行を想定しない状態で始まっている。そのためニューズレター誌と論文誌が同じ連番を共有している。この不備は寄贈先の大学図書館でも問題視されており、早急に解決することが求められている。元会長の宗宮弘明さん（名古屋大学/中部大学名誉教授）からは、過去に遡って別冊（Supplementary Volume）1～11巻で番号付けてはどうか、という提案を受けている。確かに妙案である。

---

## 幹事退任・新幹事就任のあいさつ

### 社会貢献（地域）退任のあいさつ

江端 一徳(豊田工業高等専門学校)

2021年度から3年に渡り社会貢献（地域）を担当してまいりました。担当は3年間と短い間ではありましたが、御嶽山の影響調査を、支部会の皆様方のお力をお借りしながら、今日まで継続的に続けることができ、安堵しております。また、2024年は、御嶽山噴火から10年という節目の年にあたります。今後も御嶽山の調査を継続し、地域の自然環境の変化を逃さぬよう研究を続けていければと存じます。

至らぬところばかりでご不便をおかけしたことは多々あったかと思いますが、皆様には大変お世話になりました。引き続きよろしく願いいたします。

### 陸の水 NL 担当退任のあいさつ

松澤 優樹(自然共生研究センター)

2020年度から4年間陸の水NLの編集担当をさせていただきました。着任当時はもともと農業土木系の研究室にいたため、陸水関係の知り合いも少なく、また学会の幹事の経験もないことから幹事が務まるのかとても不安な気持ちから始まりました。それでも談話会や研究発表会では、幹事の方々が声をかけてくれたり、東海支部会のアットホームな雰囲気から徐々に不安は薄れていきました。ただ、もともと細かい作業や体裁を整えることが苦手で、原稿作成の際には、いつも修正をしていただき幹事の皆さまには本当に申し訳ない気持ちと感謝の気持ちでいっぱいです。

至らない点も多く、ご迷惑をかけてしまったこともあるかと思いますが、4年間大変お世話になりました。今後も、生き物を中心に陸水分野に関わる研究を進めていきますので、機会があれば色々アドバイスもらえたら嬉しいです。

## お知らせ 会費納入について

納入方法として、下記「ゆうちょ銀行」への振込、もしくは談話会や研究発表会などでの直接的なお支払いも受け付けております。会費納入状況が不明な場合は事務局までご照会ください。2年度分の会費が未納の方は、規約に従い、翌年度には自動的に退会となりますのでご承知おきください。その際も、未納会費2年分のお支払いをお願いしております。

論文集については、納入が確認できた会員のみ、送付することが総会で承認されています。会員数の減少に伴い論文集発行の予算確保も難しい状況となっております。毎年度の送付が滞り大変申し訳ありませんが、会員の皆様にも現状にご理解頂き、確実な会費の納入をお願いいたします。退会をご希望の方は、日本陸水学会東海支部会事務局のE-mailアドレスまでご連絡ください。

日本陸水学会東海支部会事務局

E-mail: [rikusui-tokai@rikusui-tokai.sakura.ne.jp](mailto:rikusui-tokai@rikusui-tokai.sakura.ne.jp)

### <年会費>

一般 2,000 円、学生（大学生以上）1,000 円、高校生以下は無料、  
団体 4,000 円、家族 3,000 円

### <ゆうちょ銀行からお振込みの場合>

記号：12120-2 番号：73385891

名前：日本陸水学会東海支部会

### <他の金融機関からお振込みの場合>

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：二一八（読み ニイチハチ） 店番：218

預金種目：普通預金 口座番号：7338589

カナ氏名（受取人名）：ニホンリクスイガツカイトウカイシブカイ

---

### （編集後記）

陸の水 NL 編集担当の松澤です。今回は 100 号記念ということで、歴代会長たちの貴重なコメントがたくさん掲載されています。また、今号はページ数も多く読むのも大変ですが、東海支部会設立の経緯やロゴマークの意味など誰もが気になるであろう内容が盛りだくさんです。ぜひ最後まで目を通していただけた嬉しいです。

また次号からの編集は私と同じ自然共生研究センターの岡本に引き継ぎます。長野の河川でカゲロウを追いかけていた好青年なので彼の編集も楽しみにしていただけましたら嬉しいです。

（松澤 優樹）